



イネ縞葉枯病を媒介するヒメトビウンカの本田防除 といもち病対策として置き苗処理の徹底について

県病害虫防除所では、①本年5月下旬に県西・県南地域の小麦畑におけるヒメトビウンカの生息数が、本年を含む過去7年中2番目に多く、②2~3月に採集したヒメトビウンカ越冬世代幼虫のイネ縞葉枯ウイルス保毒虫率が県西・県南地域14地点中5地点で5%以上の高い値であり、③5月27日現在の有効積算温度から計算した水田におけるヒメトビウンカ第一世代成虫の産卵最盛日が、平年並と予測されていることから、

病害虫発生予察注意報第1号を発表して、

ヒメトビウンカ発生量が多くなっています。イネ縞葉枯病対策のため、適期に防除しましょう！

と呼びかけています。

イネ縞葉枯病がすでに発生している地域で、今年の田植時にウンカ類に登録のある持続効果の長い薬剤を育苗箱に施薬していない水田や、昨年、育苗箱施薬してもなお本病の発生が多かった水田では、ヒメトビウンカの本田

防除を下表を参考に6月第3~5半旬(10~23日)頃に実施してください。

表1 水田におけるヒメトビウンカ第一世代成虫の予測産卵最盛日と予測防除適期：注意報より

	アメダス地点	古河	下館	下妻	つくば	土浦
予測産卵最盛日	本年	6/10	6/15	6/14	6/16	6/14
	平年値	6/10	6/14	6/13	6/14	6/13
予測防除適期	本年	6/10 - 17	6/15-22	6/14-21	6/16-23	6/14-21

<防除のポイント>

- 1 麦畑にて産卵、増殖したヒメトビウンカが水田に侵入するため、周辺に麦畑がある水田では特に注意が必要です。
- 2 本田に飛来した成虫が、産卵、ふ化して発生する第二世代幼虫を対象に本田防除を実施します。なお、防除にジャンボ剤や豆つぶ剤、粒剤を使用する場合は、効果が出現するまでの期間を考慮して、液剤等の散布より(薬剤により異なりますが)3~5日くらい早めの処理が必要です。また、施用時は湛水状態(3~5cm程度)で田面に均一に散布し、4~5日間は湛水を保ち、散布後7日間は落水やかけ流しをしないでください。
- 3 育苗箱施薬剤としてIRACコード4Aを含む薬剤(アドマイヤーCR箱粒剤、スターダム箱粒剤、ダントツ箱粒剤、デジタルメガフレア箱粒剤、ロングリーチ箱粒剤、フルサポート箱粒剤など)を施用した場合には、抵抗性ヒメトビウンカの出現を抑制するために、本田防除ではIRACコード4A以外の薬剤で防除します。
- 4 遅植えのイネが本病に感染すると、被害が大きくなる傾向がありますので、防除を徹底しましょう。

表2 水稲 本田におけるヒメトビウンカ(ウンカ類を含む)の主な防除薬剤(令和4年5月31日現在)

薬剤名	使用量または希釈倍率	使用時期 / 使用回数	分類
MR. ジョーカーEW	2,000倍	収穫14日前まで / 2回以内	3A
スミチオン乳剤	1,000倍	収穫21日前まで / 2回以内	1B
なげこみトレボン (または)トレボン乳剤	水溶性容器10個(500ml) / 10a 1,000~2,000倍	5葉期以降(但し収穫21日前まで) / 3回以内 収穫14日前まで / 3回以内	3A
ダントツ粒剤	3kg / 10a	収穫7日前まで / 3回以内	4A
スタークル豆つぶ	250~500g / 10a	収穫7日前まで / 3回以内	4A

注) 分類欄には、IRACコードを記載しました。同一分類(コード)は作用点が同じなので、連用は避けてください。

※ この時期、いもち病防除のため、本田内にある置き苗の処理を徹底しましょう

置き苗は、本田におけるいもち病の重要な伝染源になる可能性が高いため、補植作業を終えたら速やかに処分してください。なお、処分するときは水田より引き上げて放置するのではなく、土中に埋めるなど苗が枯れて、いもち病斑を形成しないようにすることが大切で、遅くとも6月中旬までには処理を終えるようにしてください。

- 農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用して下さい。
- 営農 NEWS は JA 全農いばらき ホームページでもご覧になれます。